

おめでとうございます

— このたびは受賞おめでとうございます。キャノンとしては第8回(1982年)のキャノンサロンに続く2回目の受賞となります。「テレビを使った写真文化の啓蒙」という斬新な企画は、何がきっかけでスタートしたのでしょうか。

佐々木 ありがとうございます。21世紀に入ってからカメラのデジタル化が進み、弊社でも2003年にEOS Kiss Digitalを発売し、デジタル一眼を次世代のカメラとして育てるというミッションがありました。それ以来様々なメディアを通して、主にエントリー層のお客様に対するアプローチは続けてきたのですが、もともとカメラや写真が大好きな写真愛好家の方とコミュニケーションを取る方法はないだろうかと模索した結果、写真家たちが旅をしながら写真を撮っていくというコンセプトの番組を作ろうということになりました。

— 「旅」「未来に残したい日本の情景」「写真家」という要素は、どのように決められたのでしょうか。

佐々木 写真愛好家にとって写真家は憧れの存在であり、そんな写真家がどのような気持ちで写真を撮っているのかを最もわかりやすい撮影機会である旅(紀行)をフックにして伝えようと考えました。そのために放送枠も視聴者の専念視聴度(目的を持って番組を選ぶ率)が高いBS放送を、スポンサーについても他社様に遠慮することなく私たちの気持ちを表すことができるよう、一社提供でやらせていただきました。結果として番組を通じて、日本の情景をアーカイブすることになったわけですが、それはそのときご出演いただいた写真家おひとりおひとりのお気持ちを残させていただいているのだと思っています。

— 1人の写真家につき30分×2本の番組を構成するに当たって、登場写真家の人選に始まりロケ地の選定他、様々な苦労があることと思います。またテレビというメディアで「写真」という表現を視聴者に伝えるに当たっても、他のテレビ番組にはないご苦労があるとお察しします。差し支えなければ舞台裏のお話を聞かせてください。

佐々木 番組収録は制作会社のスタッフと共に何班かに分かれて同時進行で作業していますが、天候等に左

右されるケースも少なくなく、かなりギリギリのスケジュールで放映されることもあります。ご出演いただく写真家の人選については、他の写真家の方とロケ地が重ならないようにすることや、その写真家の方の得手不得手もございますので、そのあたりの調整に多くの時間を費やしています。

— テレビ番組の存続が視聴率に左右される中、これだけの長きにわたって番組を続けることができたのは、御社の不断の努力は勿論ですが、写真愛好家に限らず広く一般視聴者からの高い支持があったものと思います。差し支えなければどのような反応があったのか、お聞かせください。また「長寿番組になったこと」について、御社としての感想などもお聞かせいただければと思います。

て、御社としての感想などもお聞かせいただければと思います。

佐々木 視聴者の皆様から頂戴したご意見の多くは肯定的なもので「写真を始めるきっかけになった」「写真家の生の姿が分かって良かった」といった反応が多くありました。番組が長く続いたのは視聴者の皆様の支えや、参加していただいた写真家の皆様のご協力の賜物だと思っております。制作現場でも、写真家の先生方と一緒に番組を作っているという意識が高く、また番組を続けてきたことによって、写真人口の増加にも少しは貢献できたのではないかと考えています。

— 私たち日本写真家協会(JPS)は、我が国を代表する職業写真家の組織ですが、写真家という仕事、写真が表現する世界を広く知っていただく上でこのような番組があることを大変嬉しく思っています。番組ス

ポンサーであり、制作者である御社の立場から、当会に対してメッセージをいただけますでしょうか。

佐々木 番組は今秋で一旦休止の後、単発番組での放送や、新たな企画を考えているところです。220回もの番組制作はJPSの先生方のご協力ご理解あってのことであり、厚く御礼申し上げます。大変な賞を30年ぶりに再びいただいて驚く一方、これからもJPSの皆様と共に、写真の文化が広がるよう頑張っていきたいと思っております。

— ありがとうございます。

第38回日本写真家協会賞

キャノンマーケティング
ジャパン株式会社



佐々木 統さん

(取締役 専務執行役員)

(平成24年8月24日:キャノンマーケティングジャパン株式会社本社にて
聞き手/小池良幸、小池崇史、撮影/小池崇史)